

The Meeting of the Chubu Division of Japanese Physiological Society

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/20646

『学会開催報告』

第56回中部日本生理学会 The Meeting of the Chubu Division of Japanese Physiological Society

金沢大学医薬保健研究域 血管分子生理学
(生理学第一)

多久和 陽

中部日本生理学会は、中部地区の生理学研究者が一堂に会して、最新の研究成果を発表し、情報交換、討論を通じて一層の研究の発展をはかり、研究成果を社会に向けて発信することを目的に、年一回開催され、本年の大会で56回を数える。本年は、7月末に京都で国際生理学会IUPS2009が開催された関係で、例年より2カ月、後にずらして、12月初旬に金沢大学を幹事校(幹事 桜井武教授, 加藤 聖教授, 東田 陽博教授, 多久和 陽教授)として、石川県立音楽堂で開催した。

学術プログラムでは、教育講演2題と一般演題(講演およびポスター発表)が行われた。教育講演では、本学の桜井武教授により、「睡眠覚醒を制御するオレキシン系の発見」と題して、オレキシンとその受容体の発見から、脳内のオレキシン神経の投射部位の同定、動物個体においてオレキシン系が覚醒および摂食行動の調節を介して栄養状態、エネルギーバランスに応じて、覚醒レベル、感情、モチベーションなどを制御する役割をもっているなど最新の研究成果までの、明快な解説が行われた。他の一題は福井大学医学部老木成稔教授により、「世界初の1分子のK⁺チャンネル開閉の構造変化の測定」と題して、K⁺チャンネル蛋白質の立体構造変化を、日本が世界に誇る高輝度放射光施設(SPring-8:播磨)においてX線1分子計測法(Diffracted X-ray tracking; DXT)の解析手法を用いて分子の動きをリアルタイムで捉えた成果が、発表された。老木教授のグループは、 α ヘリックスの束からなる構造を有する放線菌由来のKcsAチャンネルは、束を緩めたり、絞ったりすることでイオン透過路を開閉することを世界で初めて可視化した。

一般演題発表は口演とポスターの両形式で行い、発表者の希望を優先して、振り分けた。生理学会地方会の特徴の一つは参加者が一会場に集い、高次中枢神経機能、感覚機能、循環機能、イオンチャンネル・トランスポーター機能などの幅広い領域において、しかも分子、細胞、個体の各レベルでの研究成果の発表を行い、いわば生理学会内の異分野交流を実現することである。本大会でも、高レベルの研究発表が相次ぎ、熱を帯びた討論が行われた。口演では、本学からは、桜井研究室の三枝准教授による「オレキシンニューロンによる食餌同期性概日活動リズムの調節」、東田教授による「新しい機能分子CD157と脳機能」、加藤研究室の齊藤大学院生による「レチノール結合タンパク質プルプリンの視神経再生への関与とその分子機序」の発表が行われた。この他に、名古屋大学・科学技術振興機構の古家博士による「細胞からのATP放出キネティクスのイメージング解析」、生理研秋田博士による「[Ca²⁺ナドメイン]を介して細胞容積調節に関与するアニオンチャンネル(VSOR)の活性化機構」、静岡県立大学野崎氏による「小腸上皮タイト結合タンパクClaudin15機能のノックアウトマウスを用いた解析」、富山大学藤井氏による「胃酸分泌細胞アピカル膜におけるH⁺,K⁺-ATPaseとKCC4の機能連関」など、最新の研究成果が続々と発表された。

ポスター発表では、桜井研究室の辻野助教による「ナルコレプシーモデル(Orexin-ataxin3)マウスの開発とこのマウスを用いたナルコレプシーにおけるモノアミン神経の関与」、同研究室本堂大学院生による「睡眠・覚醒の制御におけるオレキシン受容体とヒスタミンH₁受容体の役割」、加藤研究室の守大学院生による「神経毒を利用した網膜ドパミンニューロン破壊の手法を用いたゼブラフィッシュ視覚感度の解析」、同研究室杉谷助教による「視神経損傷後修復における第13因子Aの関与」、同研究室郡山助教による「視神経再生におけるNO-cGMP経路の関与」、同研究室高木大学院生による「1-isopropylpyloxy-genipinの網膜神経節細胞における軸索伸長作用メカニズム」、同研究室藤川大学院生による「視神経損傷後のゼブラフィッシュ網膜におけるニューログロビンの発現と局在」、同研究室永島大学院生による「視神経損傷ゼブラフィッシュ網膜におけるHSP70発現と細胞生存への関与」、東田研究室横山准教授・黄大学院生による「新規I型膜タンパクgpmmbの中枢神経系における発現」、多久和研究室の安藝大学院生による「血管内皮細胞のTGF β 1-Smadシグナル伝達系におけるクラスII α 型PI3キナーゼC2 α の役割」、同研究室の杜大学院生による「脂質メディエータースフィンゴシン1-リン酸(S1P)受容体S1P2による腫瘍血管新生の抑制」、同研究室の戚大学院生による「徐放化S1P製剤を用いた虚血肢における血管新生療法」、同研究室の多久和典子協力研究員による「心筋リモデリングにおけるスフィンゴシン-1リン酸情報伝達系の病態生理学的役割の解析」などの興味深い発表が行われ、ポスター会場では活発に意見交換が行われた。

学術プログラム以外では、総会を開催し、生理学会各種委員会報告、次期・次々期開催校の紹介・決定が行われた。また、恒例の懇親会、テニス大会を開催し、会員相互の親睦を深めた。本大会には100名を超える参加者があり、2日間を通じて熱心な討論が行われ、実り多い大会となった。様々な分野の生理学研究者が、金沢駅前の交通至便かつ快適な音楽堂交流ホールの一会場に集い、「各分野の最新研究」に触れ、情報交換、討論を通じて研究の一層の進展をはかるとの本会の使命を達成できたものと思われる。関係者の皆様には、深謝申し上げます。

